



TITLE:

ウォルター・バジヨットの研究: 経済思想および経済理論を中心として (Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

岸田, 理

CITATION:

岸田, 理. ウォルター・バジヨットの研究: 経済思想および経済理論を中心として. 京都大学, 1981, 経済学博士

ISSUE DATE:

1981-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/222899>

RIGHT:

氏名	岸 田 理 ぎし た おさむ
学位の種類	経済学博士
学位記番号	論経博第48号
学位授与の日付	昭和56年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	ウォルター・バジヨットの研究 ——経済思想および経済理論を中心として——

論文調査委員 (主査) 教授 平井俊彦 教授 大野英二 教授 菱山 泉

論文内容の要旨

本論文は、1860・70年代に活躍したウォルター・バジヨット Walter Bagehot (1826-77) の経済思想の特色を、主として経済学方法論および経済思想史の視角から解明し、イギリス古典派経済学の衰退から新古典派にいたる過渡期の様相に光をあてようとした労作である。

序章「バジヨットの経済思想」のなかで、バジヨットの当面したイギリス経済学の動向と、これに対するバジヨットのとった立場が概括的に示されている。19世紀の中葉、イギリス古典派が解体するにつれて、二つの動向が生まれてきた。一つは、古典経済学の理論的成果を全面的に否定して新しい経済学を樹立しようとする方向（限界効用理論あるいは歴史主義経済学）と、もう一つは、古典経済学の理論を再吟味することによって、その修正・発展を図ろうとする方向（新古典派経済学）とであった。これら二つの動向に対し、バジヨットは一面で、歴史学派の歴史的方法の真理性をみとめるとともに、他面で古典経済学の演繹法をも評価した。つまり、両者の調和をこころみ、それぞれの方法が相対的に妥当する領域をみとめた。人類社会には、未開社会と発展社会の二つの社会があり、前者は単調にして同質的な社会で歴史的帰納法が適用され、後者は社会進化の結果として生じた複雑にして異質的な社会で演繹法が妥当する。時間的・空間的に二つの社会が並存するが、社会進化論の立場から人類社会は文明社会へと進化するというのが、バジヨットの歴史観であった。こうした歴史観から、バジヨットは古典経済学の領域を限定することによって、正しい位置に戻し、マーシャルの新古典派経済学への道を準備することとなったのである。

もう一つのバジヨットの特色は、世界経済学の創造という構想であった。1870年代にドイツ経済の抬頭を目前にして、バジヨットはむしろ、ディズレーリのような侵略的帝国主義の立場をとらず、自由競争の原理にもとづいて各国相互間の利益を図ろうとした。つまり、コスモポリタンの立場に立ち、やがて世界的規模で同一の経済状態が実現するものと考えた。これは、政治的にも「中道左派」を志向する自由主義の立場に照応するものであった。

本論は三部から構成されている。バジヨットのきわめて巾広い活動を映して、第一部「人物と思想」のなかでは、文芸思想と政治思想における特質が、予備的に考察されている。まず、バジヨットの文芸思想

の特質は、どこまでも事物を客観的に観察する目と、もう一つには作品の背後にある心理から演繹的に文学作品を解明するという手法にあった。さらに、その政治思想とはといえば、一方で保守主義を退けるとともに、他方で性急な行動主義を排する、穏健な自由党員であった。たとえば、議会改革にたいする態度においても、一方で地主階級の過度な勢力の温存に反対するとともに、他方で、労働者階級に対しても安易な妥協を戒めた。こうした態度は、ヴィクトリア中期のイギリス中流階級の思想と感情を忠実に映し出したものである。

第二部「古典派命題の吟味」が、本論の中心部分である。ここの三つの章のなかで、古典派命題を吟味することにより、バジヨットにおいて古典経済学がいかに批判的に継承されたかが、検討されている。スミスやリカードが完成させた古典経済学を、それ以後の古典派が十分に展開しえなかったのは、経済学と歴史を調和させなかったからであると、バジヨットは批判する。これに対し、バジヨットはスペンサーの進化論的歴史観に立ち、「労働移動の可能性」と「資本移動の可能性」という二つの古典派命題について吟味した。この吟味は、『フォートナイトリー・レビュー』誌上の論文「イギリス政治経済学の諸公準」のなかで、おこなわれたのである。まず、一国内部で労働が自由に移動しうる可能性の命題が取り上げられる。バジヨットは、この命題がどの社会においても普遍的に妥当するものではなく、イギリスのような商業の発展した文明社会でのみ妥当するものであることを立証する。というのも、そこでは(1)多数の職業が存在し、(2)治安と秩序を維持できる強力な統治機構があり、(3)常備軍制度が確立し、(4)奴隷制度が消滅している、という四つの必要条件が充たされているからである。だが、未開社会では、こうした前提条件が存在しない以上、古典派命題は妥当しないというのである。こうした考え方は、先の独自の歴史観と結びつくはずである。

もう一つは、資本移動の可能性の問題である。このばあいには、先の命題よりも問題は複雑であって、未開社会でも資本移動はみとめられる。だが、バジヨットは、基本的には商業文明国でのみ、資本移動の可能な条件が完全に充たされていることを、論証する。この前提条件は、(1)移動可能な労働、(2)処分自由な資本、(3)一般的企業知識、(4)貨幣と貨幣移し変えの手段、(5)強力で公平な政府の五つが存在することであり、それぞれについて考察される。これらの条件は、現在のところイギリスにのみ妥当するのだが、未開社会もほかにイギリスに近づくというのが、かれの社会進化論であった。さらに、資本移動の可能性について注目すべきことは、バジヨットの特色である世界経済学の構想と結びついていることである。リカード段階とちがって、1870年代の資本主義では、一国内にとどまらず世界的規模で資本移動がおこなわれるようになってきたからである。バジヨットは、この新しい条件を、(1)国際的貸付資金、(2)国際的投機資金、(3)青年の海外移住の三つの条件について検討したのである。

第三部、古典派経済学者論は、古典派経済学の基本的仮説の章をはじめとし、スミス、マルサス、J. S. ミルに関する三つの章からなり、リカードについては、付録として訳出されている。まず、バジヨットは論文「政治経済学の予備的考察」のなかで、その基本的仮説が、(1)欲望を追求する経済人という経済主体、(2)財貨の使用価値という対象の側面、および(3)土地の有限性と人口の増大という三つの要素にある、と考える。この検討から引き出される結論は、古典経済学が自然科学としての物理学とアナロジカルな社会科学とみなされ、抽象科学だということになる。もちろん、バジヨットは経済学の研究には、あ

る種の不確実さが残ることをみとめてはいるが、自然科学と社会科学との区別を明示しなかったことは、バジョットの限界を示すものといえよう。このことは、バジョットのスマス像についてもみられる。たとえば、バジョットはスマスを単に経済学者として捉えず、道徳哲学者として捉えてはいるものの、スマスの経済人を利己心に解消したり、価値論を抜いて価格論体系とみなしてしまった。もっとも、バジョットは古典経済学を抽象理論として一義的に捉えていたのではなく、哲学と経済学、抽象理論と現実的政策とを関連づけようと努めている。J. S. ミルを良識的思想家であり、労働者に対する救済策を提示した政策家と評価したことに、この点が見うけられよう。

論文審査の結果の要旨

本論文には、いくつかの問題点がみうけられる。まず第一に主として経済学方法論と経済思想史の視角が前面に出ていて、バジョットの名著『ロンバード・ストリート』および『エコノミスト』誌上の具体的な貨幣論・金融論上の諸問題にまで考察が及んではない。二つには、「貨幣の移し変え」など、経済学上の用語の邦訳にもう少し工夫がほしいし、経済学と歴史との調和というとき、バジョットに即して両者の関連性の掘り下げを必要とするであろう。また、社会科学と対比される自然科学を問題とするとき、当時のダーウィニズムの背景にもっとふれるべきであろう。

だが、本論文は、わが国で未開拓なバジョットの経済思想の研究にはじめて照明をあて、古典派と新古典派との空白期を埋めようとした所の、きわめて密度の高いすぐれた労作である。のみならず、バジョットの生涯にふさわしく、文芸思想や政治思想などの他の巾広い領域から筆をすすめるとともに、バジョットの依拠する社会進化論的歴史観の深みから経済思想を特色づけている点は、本論文をきわめて包括的で立体的なものとしている。

よって本論文は経済学博士の学位論文として価値あるものと認める。